自然環境とそれぞれが望む毎日の生活をつなぐ環境教育、提言活動を

一般社団法人 Change Our Next Decade　理事
豊島 亮 氏

――団体のメンバーとして、どのような活動をしてきたのか教えてください。

生物多様性条約等の国際会議に参加し、日本ユースの意見を発信しているChange Our Next Decade（以下、COND）のメンバーになったのは、高校を卒業する直前でした。野生動物の保護に興味があり、生物多様性に関する国内外の動きなどをインプットしたいという、自分本位な動機でした。

しかし、活動を続けていく内に、自分のためだけでなく団体のためにしなければならないことなど、だんだん自分の重視することが変わっていきました。

例えば、政策提言活動と地域で進められている草の根の保全活動をつなげるため、地域の活動団体やキーパーソンにインタビューする機会をつくったりしました。国際会議に参加させてもらう中で、現場の保全活動についてあまり知らないことに気づいたためです。

現在は、アメリカに留学しているので、他国のユース活動なども参考にしながら団体のサポート役として、資金面や人とのつながりの面から継続して活動を進めていけるよう、どうしたらよいか考えています。

――昨年度の環境教育等推進専門家会議で印象に残っていること、考えたことなど教えてください。

印象に残っていることの１つは、若い担い手が環境保全活動において不足している、という議論です。

NGOの後継者問題といえる課題の根本に、環境教育のあり方が関係しているのではないかと考えていました。環境問題を考える際に、危機感を煽るようなアプローチが多いことで、逆に視野を狭くしてしまっているのではないでしょうか。自然が好きだ、大切だというポジティブな気持ちの醸成ではなく、気候変動に対する危機感のような、どちらかといえばネガティブな気持ちが醸成されてしまっている気がしています。

環境保全活動に若い世代を巻き込むには、自らが望む毎日の生活を継続する上での課題を認識し、その課題の解決策を考えられるような場が必要なのではないでしょうか。

また、自然体験ができる場が限定的であることも、視点を変えて捉え直せたらと思います。生活する場所によっては、国立公園などへはアクセスしにくいこともあるでしょう。どこで生活をしていようと、自分の生活が自然環境とつながっていることを実感できる、そういった環境教育が必要なのではないかと思います。

――今後やっていきたいと考えていることを教えてください。

１つは、団体の活動を継続させることです。継続させたいと考えるのは、生物多様性分野の国際会議の場で、他の国に比べ日本からのユース参加者が少ないと感じるからです。ユースを国際会議へ送り出す数少ない日本の若者団体として、これからも国際会議とユースをつなぐ役割を果たしていけたらいいなと思います。

また、日本国内のユースの捉え方ももう少し変えられたらと思っています。学生であるユースと就職後数年のユース、どちらも国際的な視点でいえばユースであるはずです。「学生の活動だけがユースの活動」という捉え方が変わることで、ユースの活動もより広がっていくのかもしれません。

［聞き手：つな環編集部］

地域で保全活動を進める方へのインタビュー

豊島 亮（とよしま りょう）

小学校時代にアメリカで国立公園をめぐっていた時に、野生生物保護に興味が湧いたことをきっかけに生物多様性分野で活動。
若者が、生物多様性保全のために政策提言などを行う、一般社団法人 Change Our Next Decadeで高校卒業直前から活動。
環境省の令和５年度環境教育等推進専門家委員会の委員として携わる。